

Title	哲学史の変奏曲
Author(s)	伊東, 道生
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61401
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏 名 (伊 東 道 生)	
論文題名	哲学史の変奏曲
論文内容の要旨	
<p>本論文は、おもに十九世紀フランスにおける国家の制度化に関する問題、並びにそれに関わるドイツ哲学および当時の文学の影響を、哲学史の観点から解明するものである。革命、王政復古、七月革命と政情混乱がつづく十九世紀前半、哲学界に皇帝のごとく君臨したヴィクトール・クーザンは自ら文部大臣としても権力を奮い、革命後のブルジョワ国家の秩序安定を求める。その中核が、哲学を通じた研究と教育システムの制度化である。研究に関しては哲学を専門化し、アカデミーを再編し、自らの弟子を国内に配置する。教育に関しては、ナポレオン以後「大学」なき時代に、哲学を中心とするバカロレアと中等教育プログラムを改訂し、社会にふさわしいブルジョワジー育成を目指す。そのために彼のとった戦略はドイツ哲学の導入であり、これに従った「正統派哲学史」の作成が急務となった。想定された哲学史は、十八世紀の革命型哲学への批判と秩序安定志向を含み、国家の安定と正当化という近代哲学の課題を実践的に果たすものであった。哲学史における個別研究の進展はともあれ、クーザンのとったこうした路線は十九世紀全体にわたってフランスの哲学精神の基礎となっていた。</p> <p>しかしながら、哲学史の視点から見落とされてはならないのが、クーザンのみならずロマン派やドイツ観念論があえて無視するようになった百科全書派による哲学史成立への寄与であり、これもまた排除されていく文学との関わりである。スタール夫人による『ドイツ論』は、フランスにロマン主義を目覚めさせ、はからずもそれは、クーザン路線と一致する。一方、H・ハイネの『ドイツ論』は、反動的ロマン派批判と革命志向を含み、クーザン批判へと結びつくという局面をみせながらも、ともに哲学の専門化、制度化のなかで、前者はお飾りに持ち上げられ、後者は「純粹哲学」からは閉め出される。にもかかわらず二人の文学者の影響とイメージは、ドイツ（プロシア）をめぐる二つの極として亡霊のようにフランスにつきまとい、普仏戦争で蘇る。実はそれはドイツ観念論、とりわけフィヒテ解釈とも軌を一にしていた。J・デリダはクーザンの時代を、ヘーゲルの時代の反復と称したが、普仏戦争敗戦後の第三共和政下では、クーザンの時代が反復される。国民の再生が、今度は哲学史ではなく、国家の歴史として反復されることになる。</p> <p>以下、本研究の議論を略述する。</p> <p>第一章では、前史ともいべき十八世紀から十九世紀におけるドイツとフランスの哲学史成立の事情を論じた。哲学史についての方法論的反省が起きるのは十八世紀に入ってからであるが、『批判的哲学史』を著し、哲学史の先駆者と称されるJ・ブルッカーを、『百科全書』におけるディドロから考察することで、後にクーザンが標榜することになる「折衷主義」概念を巡る異動がみてとれる。ブルッカーはじめドイツ啓蒙派にとって、折衷主義とは、アリストテレスやスコラ神学から距離をとって、「自由に哲学する」ことであり、一方ディドロはP・ベールの懐疑主義も引き込み、折衷主義を自由と改革、反キリスト教、唯物論的傾向へと拡張し、百科全書精神と重ね合わせる。さらにディドロがブルッカーと並んで評し、同じく唯物論とベーコン流の実験哲学を標榜するデランドは、ブルッカーと同時期に『批判哲学史』を著す。ブルッカーとデランドは哲学史を描きながらも、前提となる哲学と哲学者の概念が異なることで、描かれる哲学史も異なる。デランドは百科全書的知の「^{フィヒテ}哲学者」へと傾き、「十八世紀哲学」批判のなかで姿を消していく。一方ブルッカーに続くのは「カント世代 (aetas kantiana)」である。『純粹理性批判』の最終章「純粹理性の歴史」の示唆が、ドイツにおける哲学史への方法論争を新たに引き起こし、「歴史」、「批判 (批評)」、「哲学」という概念を巡ってラインホルトとテンネマンの論争となり、やがてはヘーゲルの「哲学史」へと収斂する「物語 (=歴史)」が描かれるようになる。一方、フランスではドイツ哲学に依拠するクーザンとアカデミーによる哲学史が、百科全書の哲学史に取って代わる。</p> <p>第二章では、これを受け十九世紀前半、とくに七月王政下での正統哲学および哲学史の成立の過程を明らかにした。クーザンのみならず、十九世紀前半のフランス哲学の課題は、革命後の社会をどのように建設するかであった。それ</p>	

はとりあえず革命の哲学、十八世紀哲学のもつ破壊性への批判となり、そのモットーは「感覚主義」批判である。この用語を最初に使用したのはC・ヴィレールである。彼によるとロックにはじまる経験論は、『百科全書』派やヴォルテールに引き継がれ、なによりもコンディヤックにおいて正統なロック主義を外れ、「感覚とその変様」を唯一の認識源泉とする極端な感覚主義となる。フランスの新しい形而上学となった感覚主義は、道徳を利害関心へと還元する。こうしてヴィレールはその後の哲学史図式と記述のエクリチュールもつくりあげる。なお、第三章で取り上げたJ.M. ジェランド（もしくはドゥージェランド）も、また『比較哲学史』（1804）で感覚主義の語を採用し、かつカント世代と同じ哲学史記述の問題を共有し、クーザンにも影響を与えたが、幾分十八世紀型スタイルの哲学史であったため、時代と共に抹消されていく。

その後、感覚主義批判は、ロワイエ＝コラルがスコットランド学派を引き合いにだして、コンディヤックに対抗することからはじまる。それを引き継いだクーザンは、安定した社会秩序に不可欠な哲学を、感覚主義に対抗する原理としてはスピリチュアリズム、哲学史記述とその実践面では折衷主義を標榜して、哲学を中心とする教育と研究の制度化を図る。プロシア視察を元にした教育改革、内的秩序を守る「道徳的徴兵」である一般教育、すなわちリセを中心とする中等教育改革と、バカロレア・プログラムの制定、エコール・ノルマル改革、そして何よりも「道徳・政治学アカデミー」を中心とする学士院の再組織化である。このアカデミーは哲学と哲学史のコンクールを行い、そのテーマ設定が哲学研究およびバカロレア・プログラムに直結し、クーザンの「連隊」はフランス全土に行き渡り、その影響力は十九世紀末まで及ぶ。

第三章では、クーザンがスコットランド学派と共に感覚主義に対抗するために導入したドイツ哲学の受容史を、文学も交えて論じた。その最初期に位置するのがヴィレールであり、最も影響力をもったのがスタール夫人であった。そしてこの路線を引き継いだのは、バルシュー・ドゥ・パンオーエンの『ドイツ哲学史』である。ドイツ哲学史をライプニッツからはじめ、十八世紀フランス哲学に対抗させるという戦略はクーザン派と同じであるが、後に正統哲学史が描かれると、哲学史からは消去される。これに対してスタール夫人と同一の署名『ドイツ論 (De l'Allemagne)』を著したハイネは、同じドイツ哲学史を、革命と直結させて描く。その際、ハイネは感覚主義を社会システムと解釈し、キリスト教唯心論に対抗する唯物論哲学の必要性を訴え、それを独自に「汎神論からの帰結」として描き、物神化という現代の診断にもつなげる。ハイネが想定するのは、単純な唯物論が陥るモノに対する平等主義ではなく、芸術・文学をも巻き込んだ革命である。その矛先はクーザンにも向き、彼特有の皮肉に満ちたスタイルで揶揄する。「滑稽と崇高」を両極にもつ、その文体はユゴーとも近親性を持つと同時に、ジャーナリスティックな文体は「芸術時代の終焉」を意味するものであった。こうしたハイネによるクーザン攻撃の一つの収斂点は「無関心主義」である。芸術の自律を唱えるクーザンの見解は、芸術と政治、哲学を結び付けるハイネとは相容れない。ハバースマスによればハイネはその点で公共性に関与する「知識人」の先駆けであった。しかし文学を切断し、哲学の領域をアーカイヴ化し、哲学言説と論文スタイルを決定する「ユニヴェルシタスの存在的－百科全書体系的」（デリダ）からするとハイネはもはや哲学者ではなく、「詩人」なのである。研究すべき哲学領域、哲学言説そして哲学者なるものが設定され、その一つの結論としてクーザンの弟子であるA・フランクによる『哲学事典』（1843）が登場する。

感覚主義批判と哲学のアーカイヴ化は、翻訳にも影響を及ぼす。ジェランドはすでに翻訳の重要性は指摘していたが、ドイツ哲学のフランス語訳はかなり遅れ、しかも明らかに戦略的であった。一つのメルクマールとなる翻訳がバルシュー・ドゥ・パンオーエンによるフィヒテ『人間の使命』の翻訳であった。この書は感覚主義に抗し、スピリチュアリズム哲学への入門書と見なされ、フランスにおけるフィヒテ受容に決定的な影響を与える。アカデミーでフィヒテが論じられるのもこの路線であり、その上に汎神論、懐疑的観念論という紋切り型の言葉が貼られるだけである。ステロタイプ化したフィヒテ像は、十八世紀哲学への対抗ともなるが、懐疑主義と無神論も示し、一連の翻訳と研究から、フランスの鏡像としての「ゲルマニア」と帝国「ドイツ」という二つの像と奇妙にも一致する。（第四章）

普仏戦争敗北後、「試練の日々」をおくるクーザン派のE・カロにとって、この二つのドイツ像はカント、ゲーテの良いドイツとビスマルクとヘーゲル悪いドイツ、スタール夫人とハイネの二つ『ドイツ論』として現れる。同時にカロにとって、この二つのイメージは共和政のフランスとボヘミアンが混じる群衆のフランスの反映ともなっている。（第五章）

哲学者から締め出され、革命の希望が消えたハイネは転向する。「転向」後の『告白』で無神論放棄を弁解するハイネの言語行為は、自己の正当化という言い訳に横滑りし、行為の責任主体として、ハイネは自らを詩人と規定する。詩人の名で時代を封印するハイネの「告白」はルソーのそれのように弁神論として機能するようになる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (伊 東 道 生)			
	(職)		氏 名
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	入江幸男
	副 査	大阪大学 教授	上野修
	副 査	大阪大学 准教授	舟場保之
	副 査	岡山大学 名誉教授	山口信夫
論文審査の結果の要旨			
以下、本文別紙			

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 哲学史の変奏曲

学位申請者 伊東道生

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 入江幸男

副査 大阪大学教授 上野修

副査 大阪大学准教授 舟場保之

副査 岡山大学名誉教授 山口信夫

【論文内容の要旨】

本論文は、おもに十九世紀フランスにおける国家の制度化に関する問題、並びにそれに関わるドイツ哲学および当時の文学の影響を、哲学史の観点から解明するものである。全6章からなり、A5判2段組み 225 頁の分量である。

「第一章 これもまた一つの哲学史」では、前史ともいべき十八世紀から十九世紀におけるドイツとフランスの哲学史成立の事情を論じている。『批判的哲学史』を著し、哲学史の先駆者と称される J・ブルッカーを、『百科全書』におけるディドロから考察することで、後にクーザンが標榜することになる「折衷主義」概念を巡る異同をみてとる。ブルッカーに続くのは「カント世代」である。『純粹理性批判』の最終章「純粹理性の歴史」の示唆が、ドイツにおける哲学史への方法論争を引き起こし、ラインホルトとテンネマンの論争となり、やがてはヘーゲルの「哲学史」へと収斂する「物語 (=歴史)」を描くとともに、フランスではドイツ哲学に依拠するクーザンとアカデミーによる哲学史が、百科全書の哲学史に取って代わることを論じる。

「第二章 クーザンの時代」では、とくに七月王政下での正統哲学および哲学史の成立の過程を明らかにする。クーザンのみならず十九世紀前半のフランス哲学の課題は、革命後の社会をどのように建設するかであり、十八世紀哲学のもつ破壊性への批判、「感覚主義」批判である。ロックにはじまる経験論は、コンディヤックにおいて正統なロック主義を外れ、極端な感覚主義となる。ヴィレールはこのような哲学史図式と記述のエクリチュールをつくりあげる。M・デランドもまた『比較哲学史』(1804)でクーザンに影響を与えたが、幾分十八世紀型スタイルの哲学史であったため、時代と共に抹消されていく。クーザンは、哲学史記述とその実践面では折衷主義を標榜し、哲学を中心とする教育と研究の制度化を図る。それは、「道徳的徴兵」である一般教育、すなわちリセを中心とする中等教育改革と、バカロレア・プログラムの制定、エコール・ノルマル改革、そして何よりも「道徳・政治学アカデミー」を中心とする学士院の再組織化などである。

「第三章 二人のドイツ哲学史」では、クーザンが導入したドイツ哲学の受容史を、文学も交えて論じる。その最初期に位置するのがヴィレール、最も影響力をもったのがスタール夫人、そしてこの路線を引き継いだのが、パンオーエンの『ドイツ哲学史』である。これに対してハイネの『ドイツ論』は、ドイツ哲学史を革命と直結させて描く。その際、ハイネはキリスト教唯心論に対抗する唯物論哲学の必要性を訴え、それを「汎神論からの帰結」として描き、物神化という現代の診断にもつなげる。ハイネが想定するのは、芸術・文学をも巻き込んだ革命であり、芸術の自律を唱えるクーザンとは相容れない。ハバーマスによればハイネは公共性に関与する「知識

人」の先駆けであった。しかし文学を切断し、哲学の領域をアーカイヴ化し、哲学言説と論文スタイルを決定する「ユニヴェルシタスの存在的―百科全書的体系」からするとハイネはもはや哲学者ではなく、「詩人」とみなされるようになる。

「第四章 ねじまげられたフィヒテ」では、ドイツ哲学のフランス語訳はかなり遅れ、しかも明らかに戦略的であったことを論じる。一つのメルクマールとなる翻訳がフィヒテ『人間の使命』の翻訳であった。この書は感覚主義に抗するスピリチュアリズム哲学への入門書と見なされ、フランスにおけるフィヒテ受容に決定的な影響を与える。しかし普仏戦争後は、フィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』が翻訳され、フィヒテは愛国主義者として理解される。ステロタイプ化した二つのフィヒテ像は、フランスの鏡像としての「ゲルマニア」と帝国「ドイツ」という二つの像と奇妙にも一致する。

「第五章 二つのドイツ「論」もしくは二人の『ドイツ論』」では、普仏戦争敗北後、「試練の日々」をおくるクーザン派の E・カロが、スタール夫人の『ドイツ論』をかつてハイネが批判したのと同じように批判し、かつてクーザン派が軽視していたハイネの現実的な『ドイツ論』を高く評価するようになることを論じる。

「第六章 告白という弁解機械」では、哲学者から締め出され、革命の希望が消えたハイネのいわゆる「転向」を論じる。「転向」後の『告白』で無神論放棄を弁解するハイネの言語行為は、自己の正当化という言い訳に横滑りし、行為の責任主体として、ハイネは自らを詩人と規定する。詩人の名で時代を封印するハイネの「告白」はルソーのそれのように弁神論として機能するようになる。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、十九世紀のフランスにおけるドイツ哲学の受容史を明らかにする貴重な研究になっている。十八世紀から十九世紀にかけてのドイツとフランスにおける「哲学史」研究の形成過程の研究としても貴重な仕事である。申請者は、スタール、ブルッカー、カント、ヘーゲル、テンネマン、デラント、パンオーエン、ジェラントなどの様々な「哲学史」と、それに関連する多くの第一次資料をフランス国立図書館で精査し、それらの「哲学史」の関係を明かにしている。また日本では松永澄夫、山口信夫などによるわずかな先行研究しかないヴィクトール・クーザンについての研究としても高く評価できる。クーザンが、十八世紀の革命の哲学である「感覚主義」を批判し、スピリチュアリズムによって革命後の社会秩序の回復のための教育制度の改革をめざしたこと、また十九世紀のスピリチュアリズムが、感覚主義批判のよりどころをドイツ哲学にもとめ、感覚主義とスピリチュアリズムを巡って、またデカルト哲学の評価をめぐる、様々な「哲学史」が登場し、クーザン派の哲学史が主流となっていく過程の詳細な説明を行ったことは高く評価できる。また、七月王政から普仏戦争後に至る過程でのフランスにおけるドイツ理解の変化を明確に描き、スタール夫人の『ドイツ論』とハイネの『ドイツ論』に対する評価とその変化、翻訳を通して形成されるフィヒテについてのステロタイプな像とその変化を論じ、それがフランスの政治史と密接に結びついていることを指摘した点も評価できる。ただし、論じている主題が広範多岐に渉るために、それぞれの主題の関係が示唆されるにとどまり、不明瞭になっている点があるので、それを補うために立論全体について概観し整理する「序論」と「結論」を望みたいところである。ただ、申請者には意図的に本研究を開いたままにしておこうとする姿勢も見られ、この点は本論文の意義を損なうものとは言えない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。